

共に居てほしいと願ってしまったから。共に遊ぼうと願ってしまったから。僕はよく笑っていた。なぜ笑ってしまったのかは今でも良く思い出せない。それでも一緒にいようよと遊んでくれたのだから、僕は笑っていた。

気が付けば思い出の中に二人で遊んでくれた人を友達と思っていた。僕は涙を流して、綺麗な瞳に映った答えを知りたくて。それでも何もできない瞳の中に一緒にいた人を映す。そして一生懸命になってしまったのだから。それが僕の大切なもの。それがわかったからよかった。それは一緒に遊んでくれたことを信じていた人が夜空を眺めているということなのだろうか。

なぜ、そんな抽象的なことを思い出したのだろうか。  
なぜ、そんな事象的なことを思い出したのだろうか。

僕はまだ小さかったころに遊んだことを思い出しているのだから。その少女と一緒に遊んだ記憶が今でもまざまざと甦るのだ。

友達として見てくれたその少女は今でも感謝している。そして一生懸命に僕を支えてくれた思い出と共に、僕は笑っている。

そう、永遠に。  
そう、永久に。

僕は喜んでいるのだから一緒にいてほしいものだ。神は言っているのだから。僕が喜んでくれたのは少女を見つめている。それが嬉しくて、それが楽しくて。思い出と共に封印してしま

った少女は僕が産んでしまったのだから。それはいつまでも一生懸命になっているのだから。よろしくと、言ってくれた答えはどこに行つたのだろう。

一緒にいた部屋の中で少女のくれたポスターがひっそりと笑つてくれている。楽しそうに笑つているポスターの人がにっこりと、僕に微笑んでくれたかのような気がした。

僕はベッドの上で天井を見つめる。蛍光灯がチカチカしている。窓から差し込む光が今はまだ朝だということを知らせてくる。傍には愛猫がごろごろベッドから転げ落ちる様が見えた。少しだけクスリと笑つてしまう。この表情が女っぽいつてよく笑われてしまうことに自己嫌悪を覚える。

「はあ、一緒に遊んでくれないのかな」

友達として遊んでくれている子がいまいかなと、最近、お母さんに言われたのだ。なにも出さない、そして不甲斐ない僕に声をかける唯一の存在なのかもしれない。一緒に遊んでくれないのは僕の不甲斐なく、ダメダメ人間だということも少しは自覚しているつもり。一緒に遊んでくれないのは僕の悪いところ。それはわかっているのだけど、でも、一緒に遊んでくれないのはやはり、ダメだということだろうから、こうやって悩んでしまう。

今はまだ家の中が静まっている。お母さんはまだ眠っている。お父さんはきつとどこかで遊びほつつき歩いているのだろう。ほつつき、なんて言葉を知つたのもお母さんからだ。

お父さんが一緒に僕を連れて外で遊んでいると、お母さんが泣いていた頃。僕はそのとき、

たまたま家に忘れ物をしたのだ。そしてお母さんが僕を連れていったお父さんのことを嫌に思っていることを言ったりして、そのときに「ほつつき」という単語をぼろつと言ったのだ。そして家で慰めるつもりでお父さんを無視してお母さんのことをなるべく考えるようにしたら、お父さんが僕を無視して遊びに出掛けたのだ。それがどれだけ続いているのだ、と父方のおじさんが叱つても知らん顔。

結局、僕を産んでからのお母さんの人生は後悔かもしれない、と言ったのはあながち間違いないものなのかもしれない。それと、お父さんは仲が悪いだけならいいが、それを超えて無視しているから、家族仲は冷え切っている。もうお母さんは離れたいと思つているのかもしれない。そう思う。

僕は一緒に遊んでくれる子供がいけないことに嘆いているけれど、それでもいなくてもそれはそれで散歩なんかを楽しむことができるのだから、今でもゆつくりと自分の心の心を研磨していくという方針に従つて、ゆつたりとしている。

そんなことを考えていたら、外の景色が霞んで見えてきた。陽射しが僕の目元に突き刺さっている。痛みなんかはないが綺麗な星屑がくれる星光が僕に起きると言っているみたいだ。僕は今でも信じている、世界のことを作っている人を探すというしめいかんを頑張つて探し始めるつもりなのだ。楽しくても、楽しくなくても、僕は僕で頑張つて、お父さんにはならないよ努力しよう。

ふと、そう思つて窓から外を見ると、蒼空に雲が流れていた。まるで、僕の考えを支えるかのようにゆつたりと雲が靉靄としていた。

友達の感情が 教えてほしいのだから

一緒に居てほしいのだと 想っているのなら

一緒だということに感謝しながら

友達としての思い出を大切に

嬉しさ倍 哀しみ半減

一緒にいるのなら そのことを知るのなら

一人称の言葉を使いながら 二人称の言葉を使いながら

そして

三人称のことを知っている

それが 大切なんだから

「おおい。今日は遊ばないのかー!」

外で一人で楽しんでいると隣の小父さんがスコップを持って何をしているのだろうかと思わざるもないことを、と僕も動揺していた。

「どうしたんですか」

「いやな、最近孫夫婦に子供ができたんじや」

「え？ でも、小父さんのお孫さんってまだ、幼いんじや。夫婦にはなつてないし」

「養子をとつたんじやよ。だからその養子が今日遊びに来てな」

嬉しくなっている表情を僕の顔から読み取つたのだろう。遊びたくてしようがないという顔がバレてしまったのだ。だから、僕としては嬉しくて仕方ない。ただ、学校を休んでこうやって家の傍で一人で遊んでいるのはあんまり勧めることはできないが、それはとてもじやないが僕としてはその時間を共に過ごせるのは嫌なのかもしれない。とりあえず、僕は笑つて過ごさうとしたのだが。

「養子と友達になつてくれやしなやか」

「めんどくさいので。では」

「そうか、残念じやのう。美味しいクッキーがあるというのに。今晚はステーキを食べようとしていたのじやが」

「養子さんって可愛そうだね。僕、美しい人と巡り合えてラッキーだな」

「じやが、そんなものはどこにもないのじやよ」

「めんどくさいので。では」

「今日は草むらにいるウサギの肉が美味しいのじやよ。養子とステーキを摂取すると胸も大き

くなっているようで、これから、旅立つことも考えたら、豊満であるがゆえに」

「僕、その養子さんと結婚する！」

「さて、わしは行こうかの」

僕はこんな会話をしているのがどうしてか面白く感じてしまった。そして、僕は下心ありありな自分に些か恥ずかしさを覚えてしまつてしまった。こんなにも動揺しているのが小父さんには伝わつてしまったのだが、それでもいいとも思える。そしてこれからのことを思い出すことに嫌気が差して、それを小父さんには見えないようにした。

空を見上げる。綺麗な月と星が煌めき、三日月と呼ばれるものと流星群と呼ばれるものが重なつて、夜空を重ねる。星々に月が教えている。

一生懸命になれば夢は叶うよ。

どうしてかそんなことを思い出したが、笑つて、朝空を見てみると、鳥が飛んでいた。こんなにも美しい世界を知っているのだからと、笑っているのが嬉しくて。鳥はいつもサミーゴを知っていた。サミーゴは笑っていた。

さあ、行きなさい。

そんな予感がして、僕は綺麗な杖を持って、小父さんを目で追いかけた。

いつものように笑っているのだから

それがたとえおかしくても

ひつようせいあらゆる 言葉と共に

涙をながしてしまったときの

言葉は

必要性なんてどこにもない

それが故に

人は泣くのである

僕はとりあえず、外に出てみる。夜空が美しく、見た感じでは思い出の中にいた、少女と重なる妖精が僕の頃と何も変わらずに必要性ありふれる言葉をそれに映し出す。綺麗だと信じているのだから僕という感情はどこにも行かなくて。それが知っている答えだとしても、追及せずはいられない。僕の正体を知っているのは誰もいない人なのだ。人という存在が僕を作り、僕という存在が人を創る。それは間違いない哲学的思考だが僕は笑って答えることができるのだから。いのだから。必要以上の言葉を景色に映して、心に涙を流すことを作ることができるのだから。答はどこにでも転がっているのだから。いつもながら、僕のことを笑っている少女は浮遊している。感情がそれとも心か。思い出の中にいる人を魔と呼ぶとすると、それはたいして意味のないものなのかもしれない。魔はこの世界には存在しない。いずれにしても世界は何も変わ

っていない。それだけなのだろうか、笑ってほしいと思つた答えは意味のないものだとしても、想いだけは大切にたくて、思い出の中でいつも笑っている少女に応えてあげたい。僕はいつものように覚えてある答えをここで出したいのだろうか。それは大切なものなのか。それは必要なのか。それは想いに反することだろうか。

わからないと自問自答。必要性があるのかはわからないけれど。それがどこにでも転がっているのなら、何もしないのだと知っているから。答えは、答えは。

「なんで、こんなにも難しいことを考えているんだろ」

わからない。言葉の中に潜む悪意が僕を志向の苦しみに突き落とすのが怖くて。どこにでもあるものかもしれない。わからないのかもしれない。でもそれらしきものはどこかにあるはずなのに。それは失いたくないのに。でも、それがそれでいつも以上に大切なものだ知っている。

あのとき、小父さんと会話したことが今でも心に残っている。そんな印象を初めて抱いた想い。心に灯された光はいつまでも絶やされることはない。そしてその魂はいつに増して笑いを残していつまでも傍で泣いてくれるのかなど、必要ではない志向を持つてしまうのもいずれ失つていくのかもしれないと思つてしまうのはどうしてだろう。

いつの間にか、外は雨。晴れだった昼間から一転して曇天に雨雲が突き刺さる。泣いているのは鳥か、それとも何もわからない、僕なのか。それもわからず、今日も家の中で外を眺めな

がらベッドで横になっている。何もしないのはいけないけれど、言葉を残すのは必要ではないからいつものように言葉を紡いでいくぐらいいいか僕にはできない。なぜ、最近、哲学的思考を繰り返すのだろうかと思ってしまうのだ。面白おかしく毎日を過ごせばそれでいいはずなのに。僕はうだるような暑さが嫌いだが、寒気極まる突き刺すような痛みは好きである。そんな意味不明な自分の身体が少しおかしく思える。それはとても馬鹿らしくくだらないのだが、それにしては笑顔を作ることが素敵なのかもしれない。いずれにしても、答えを持ち出すのだから僕は時々思い出す。言葉を思い出すのが当たり前になっている自分がいつものような自分を素敵にしてしまう、そんな思い出を。

いつの間にか、外は煌めいているのだ。光が溢れる夜空に月だけは輝いていた。

「ねえ。私と一緒に居たいって思った人ってあなた？」

月から聞こえた気がした。それが耳を疑うようだとは全然思わなかった。何もしなくても言葉は大切なんだと知っているから。必要以上に想いは載せないのだと。

「知らないよ。でも僕の声に聞こえるような、そんな意味の分からないものがなんで素直に」

「何を言っているのよ」

「意味不明な言葉です」

「それを自覚しているのね。なんて馬鹿な子」

「馬鹿で悪かったですよ。あの人」

「あなたです」

「犯人？」

「なんのよ」

「漆黒の天使様みたいな感じ」

「この番組は漆黒の悪魔様の提供でお送りしました」

「ということで、帰ってください」

「せっかくボケたのに！　なんてあなたは非情な人！」

「ということで寝ます」

「寝落ち禁止！」

僕はからから笑ってベッドから降りる。

「僕のことを知っているんなら、もしかして隣の養子さん？」

「うん。なんかおじいちゃんがいたら嬉しがつてくれるよって言ってたから。それと」

一瞬空気が凍った気がした。それに少し体が怖気づいた。僕は笑っていいのだろうか。そんなくだらないことを気にしてしまった。

「サミーゴをどうして知っているの」

あれ？　僕の意識はどこに行くの？　人魂のようなものが抜けていくよ？　目の前に可愛ら

しい女の子がいるよ？

「サミーゴは大切な鳥の名前。それをどうして知っているのか、答えてくれる？」

この人は誰？ 一瞬飛びかけた意識が笑っているのだとしても僕は恐怖になってしまうのだから。

「まあ、いつか」

そしてその空気が穏やかになる。それは何も残さず消えた。なんだろうと感じてはいるのだが、それがわからなくて。

「ごめんね。私の家系は代々魔族の血が流れているから。きつとこれからもそんな人生になっていくのだろうけど。あなたがいてくれたらまた旅も出来ると思ってたね」

「旅？」

僕は恐怖を感じている。いつものように穏やかな気持ちを取り戻したいと思ってしまう。綺麗な瞳の中に潜んでいるこの女性の悪は僕にとっては負の力を感じてしまうのだ。そしてそれは僕が求めている答えだったのかもしれない。

「旅はね、危険だよ」

そんなことを知らないくせに、シラナイ？ そんなことを知らずに、シラズニ？ 僕は笑って良いの、ダメだよ？

「必要以上のことは必要としないこと。まあ、今日はいいさつに来ただけだから。この家の場所覚えていずれあなたを導くから。運命に絆される前にいつまでも考えないこと。じゃ」

そうして、女性の空気は消えた。ここからこんな雨の中にどこに行くのかはわからないけれど、僕はとにかく、固まって何もできないのが本音だった。

女性は悪なのか。そしてその反対の正なのか。そんなくだらない思考の中に女性といられるのなら、僕はわからないけれど、必要以上に考えてしまっているのが、狂いの象徴になっているのだと、教えてくれたのかもしれない女性。曖昧な考えは少しずつ心に残りだす。そして心に刻まれていく、一つ一つの言葉。笑っているのが美しいのだと。泣いているのが美しいのだと。

ただただ、それだけを知ったから、教えてくれるのかなと潜んでいる悪夢は夢魔に作られていく感情。わからないことは心に残しだしていく、そんな世界を創りたいと、そして言葉を失いつつの中に世界は一つも答えになっていないのだと知っているから。

やはり、僕は混乱しているのだろうか。女性のことが気になるも、今はまだ記録の中に潜む心がいつまでも忘れてしまったのだから。

だから、行こうと思う。これから、僕はいつものように心を大切にしている自分を愛するところが大切なんだと思えばそれはそれで解決できるのかもしれない。女性と共に旅をして僕の答えを知ろうと思う。

僕の答え。

それは。

世界とはどのように創られているのかということ——。

知り尽くした答えを求めても

知っているが故に知らず知らず

笑いつくすのだから 答はどこにでもある

答を知るものがありふれている世界の中で

どこにでもあるような人の中に人は存在できる

それが故に それが大切なのだと

知り尽くしたのだからわかる

それが 答なのではないのか

未だわからないが それは

大切なんだと 今

知った

「旅立つ前に」